

2024 3.11 mon 17:00~19:00

「ひなん」する

といふこと Vol. 2

見えてきた様々なかたち



東日本大震災から13年

3.11追悼シンポジウム

九州7県への
避難者数
1,060人

約 **30,000**人の
全国の
避難者数

※2023年12月15日現在(復興庁調べ)

カトリック大名町教会一階講堂にて

参加費無料

〈主催〉「福島原発事故被害救済九州訴訟」原告団〈共催〉「福島原発事故被害救済九州訴訟」弁護団・
「原発なくそう!九州玄海訴訟」原告団・「原発なくそう!九州玄海訴訟」弁護団・「原発なくそう!
九州玄海訴訟」を支える会・玄海原発プルサーマルと全基をみんなで止める裁判の会〈協賛〉カトリック
福岡教区 社会福音化委員会・今を生きる会・PP21ふくおか自由学校運営委員会〈後援〉原発止めよう!
九電本店前ひろば・さよなら原発!福岡・福岡県原爆被害者団体協議会・福岡市原爆被害者の会・
Fridays For Future Fukuoka (FFFF)・さよなら玄海原発の会

＼ ZOOM配信 /



<http://bit.ly/30aocyN>

[お問い合わせ] 福島原発事故被害救済九州訴訟原告団事務局(内藤 哲) / Tel:090-9530-3148

「ひなん」する

ということ Vol. 2

2011年3月11日の東日本大震災および
東京電力福島第一原子力発電所の事故から13年以上が過ぎた。
東日本各地から九州に避難してきた人たちの、こちらでの生活も長くなった。
避難が長期化するなかで見えてくるのは、一言で「避難者」と括ることはできない、
それぞれが抱える葛藤や困難、様々な生活のかたちだ。

このまま避難し
続けるという選
択、仕事や人間関
係を失った故郷
に戻るという選
択、どちらが辛い

もう戻れないのだ
から「移住」と言
わざるを得ない。
ここで生まれていく

残してきた親が心配だが、
幼かった子どもたちの
故郷はもうこちらになった

地震、水害、戦争――

私たち誰もが避難者になりうることを、

今の私たちはよく知っている。

「なぜ逃げない」「なぜ去った」「なぜ戻らない」などと、

第三者が非難することは容易だ。

しかし、当事者にならないと分からない、

あるいは、当事者になっても分からず迷い続ける、

「なぜ」への葛藤がある。

見えてきた様々なかたち

東日本大震災から13年経った今の
様々なかたちを当事者が語ります。
「ひなん」(避難・非難)するということを
いま一度、ともに考えてみませんか。

- 第1部 映像「見えてきた様々なかたち」
前田穰司(CAT & OWL PRODUCTIONS)
- 第2部 報告「13年後の九州在住避難者アンケート」
伊東未来(西南学院大学国際文化学部准教授)
- 第3部 パネルディスカッション「私たちの13年」
パネリスト: 金本 暁(福島原発事故被害救済九州訴訟原告)ほか
コーディネーター: 伊東未来(同上)